

平成 21 年度 博士前期課程学位論文要旨

学位論文題名（注：学位論文題名が欧文の場合は和訳をつけること）

強化インスリン療法以降の糖尿病児童生徒への学校生活支援に関する現状分析

学位の種類： 修士（看護学）

保健科学研究科 博士前期課程 看護学 専攻 学修番号 05853602

氏 名： 榎本 聖子

（指導教員名： 河原 加代子 教授）

注：1,000 字程度（欧文の場合 300 ワード程度）で、本様式 1 枚（A 4 版）に収めること

【 目 的 】

強化インスリン療法以降の糖尿病児童生徒への学校生活支援と学校－医療機関連携の現状を分析し、看護職のかかわりについて示唆を得ることである。

【 方 法 】

埼玉県の公立学校に勤務する養護教諭 997 名を対象に、研究者が作成した自記式質問紙による調査を行った。質問内容は、①糖尿病に関する専門知識と低血糖への対処、②学校での支援の実際、③医療機関との連携等であった。①は全対象者に質問し、②と③は、強化インスリン療法普及以降（現在または過去 10 年間）に糖尿病児童生徒を指導した経験のある養護教諭に質問した。

【 結 果 】

有効回答数は 451 であった。1) 対象者の属性：①職務経験年数の平均は 18.9 年、②看護師免許所有者は 40 名 (8.9%)、③現在または過去 10 年間に糖尿病児童生徒を指導した経験のある養護教諭は 204 名 (45.2%) であった。2) 糖尿病に関する専門知識と低血糖への対処：①養護教諭は、糖尿病に関する基本的な理解はできていたが、長期合併症やヘモグロビン A1c に関する知識は不十分であった。②現状では血糖値を正常に保つよりも、低血糖発作を起こさないことが重要と考えている養護教諭が多かった。③糖尿病に関する専門知識や低血糖への対応についての判断は、指導経験の有無や看護師免許の有無、医療機関との連携の成否による有意差が認められた。3) 学校での支援の実際：①家庭との連携や学校内の教職員の連携は良好で、多くの糖尿病児童生徒は健康と言われる児童生徒と変わらない学習活動ができるよう支援されていた。②血糖測定やインスリン注射、グルカゴン注射などの医療的ケアを依頼された経験のある養護教諭は少なくなく、そのうちの一部は注射の実施を承諾していた。4) 医療機関との連携：①養護教諭の 95.4% が連携の必要性を感じると回答した。連携ができているとする回答は 53.6% で、必要性に比べ連携は不十分であった。②医師から直接説明や助言を受けることが、医療機関との連携ができているとする養護教諭の認識に関係していた。③連携における養護教諭と看護職とのかかわりはほとんどなかった。

【 考 察 】

糖尿病治療や治療目標に関する情報は養護教諭に浸透していなかった。血糖値を可能な限り正常に近づける意義について理解を得るとともに、低血糖発作への心配や警戒感を軽減することが、適切な学校生活支援に繋がると考えられた。医療的ケアの実施やより専門的な低血糖対策等、学校での看護実践について、現状に応じた看護職の介入が必要であると考えられた。